

第51回 防災カフェ（Web）を開催しました。



女性目線^{※1}でチェック！

防災の“落とし穴”とひと工夫

ゲスト：相川 康子 さん

((特活) NPO 政策研究所 専務理事)

日時：2020年10月27日（火）18時30分～20時30分

ファシリテーター：勝身 真理子 さん

(滋賀県理事員 (男女共同参画・女性活躍担当))

※1：女性に限定しないで、性的マイノリティーの方も、障がいをお持ちの方も、世代を問わず、すべての方という意味で女性の目線という言葉を使っているということです。

私たちは「災害対応」を<発災当日の避難や救助だから男性の役割>と考えてしまいがちです。でも、関連死を防ぎ、取り残される人をなくすためには、女性を含め多様な人達が力を合わせて取組を進める必要があります。よりよい防災について一緒に考えました。

「女性たちは大変な苦勞を強いられ、不満があっても『助かっただけで幸せなんだから我慢しなさい』という空気の中で、それを口に出さなかった。」

阪神・淡路大震災のとき新聞記者だった相川さんが感じたことだそうです。その後の災害でも同じような状況が続いてきています。



ゲスト：相川 康子 さん

女性の視点が防災に必要な理由は次の3つです。まず「災害は想定外に起きる」ためです。平日の昼、地域に女性や高齢者だけの時に災害が起きると、男性が「仕切り役」、女性は「炊き出し・救護」という防災訓練やマニュアルでは役に立ちません。想定外の災害に備えるには、リーダーの指示を待つのではなく、各自の対応力(自助力)を高めておくことが大切なのです。2つ目は「長いスパンで考えなければならない」からです。「発災直後」や「救命・救出」段階では、男性さらにいうと消防や自衛隊・警察の力に注目が集まりますが、復旧→復興さらに減災の段階では、老若男女すべての人の力が必要です。3つ目は

連続した取り組みで「いのちを守る」



災害対応は発災当日だけではない

「女性の負担が見落とされがち」だからです。避難所では、プライバシーや衛生面で問題がありますし、在宅避難でも、ライフラインが止まるので水や食料の確保は重労働です。保育所やデイサービスが閉まると、女性が家族のケアを担うことになり、出勤できずに職を失うこともあります。このような女性達の苦労が、皆が我慢を強いられる中では「取るに足りないこと」で片づけられてしま

まい、DV などの人権侵害事案は増えつつも潜在化します。

過去の災害からの教訓として「女性や災害時要援護者(要配慮者)への対応は、あらかじめニーズやリスクを想定し、マニュアルに組み込んでおくこと」と「災害の各段階を想定し、長いスパンで考えること」が重要です。また①災害時に、不可欠なニーズを満たし、不利にならないよう支援すること、②防災・減災・復興の主体として、「自分たちにもできる」という「エンパワメント(力づけ)」をすることの2つを両立させなければなりません。とくに②では、水を節約する調理術など妻役割・母役割に限定した女性向け防災講座の内容を見直し、当事者意識を醸成する必要があります。女性が防災に参画する意義は、高齢者や障がい者、性的マイノリティ、外国人住民ら、すべての当事者が参画する道を拓くことですから、「女性には調理やケア役割が向いている」というくお仕着せの女性役割に甘んじてはだめです。ハザードマップを読み、消防や防災の機材も扱え、リーダーシップもとれるようになってこそ、当事者参加の道が拓けるということでした。

現行防災の“落とし穴”として深刻なのが「災害関連死」の問題です。関連死とは、発災当日は生き延びたにもかかわらず、過酷で希望の持てない避難生活中に亡くなることで、熊本地震では直接死の4倍以上に上ります。これを防ぐには、発災当日だけでなく事前・事後の連続した地域での取組が不可欠です。また、健常者の男性が中心となつてつくられた防災計画を女性の目線で点検し、備蓄の品揃えなどの「穴」を見つけ、ともに改善していくことが、防災を軸にした地域コミュニティの結わえ直しにもつながります。

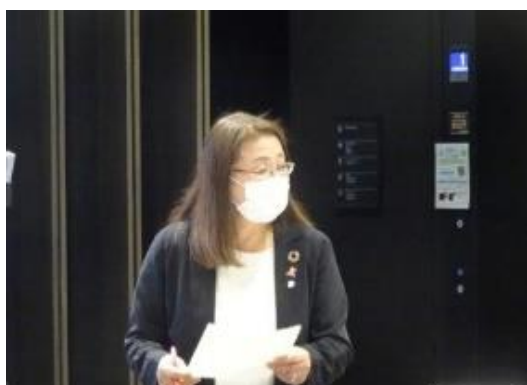
女性目線を入れることは、防災の可能性を広げることでもあります。例えば、生涯教育の推進や人権感覚の醸成が期待できますし、「防災を日常に落とし込んでおく」という点で

は、普段から地域住民と要配慮者や支援者らが交流していれば、災害時にも助け合いや福祉的な配慮が自然にできる人間関係が構築できます。さらに、女性達が自身や周囲の人達を助ける知識・スキルを習得することで、自尊感情が高まり、地域や社会に対する関心も高まっていくことでしょう。男性にとっても多様性尊重の意識が芽生え、地域住民みんなの環境保全意識も高まることでしょう。男女共同参画の推進はSDGs^{※2}の基本です。

※2 持続可能な開発目標 (SDGs) とは、平成 27 年 (2015 年) 9 月の「国連持続可能な開発サミット」で採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に掲げられた 17 の目標から構成される人間、地球および繁栄のための行動計画です。2017 年 1 月、滋賀県は全国に先駆け、持続可能な開発目標 (SDGs) を県政に取り込むことを宣言しました。

(出典：滋賀県 HP)

「災害にも強いまち」は、普段から住民同士の関係が良好で、女性も高齢者も子どもも新しく転入した人たちも誰もが自由に声をあげられる風通しの良さがあり、住民が地域への愛着や自治の心意気を持っている、地形の特性など災害リスクが周知されていて、外部に対しても開放的 (災害時の支援者の受入) 受援力があるというものです。他人任せでは自分や家族の命を守れない。「守られる側」から「守る側」へ。そのため、防災のイメージを変えていく。防災を特別なことにせず、日常生活や地域行事の中に、防災の要素を組み入れていく「ひと工夫」が求められます。コロナ禍の中でも、おうちキャンプなどできることは沢山あるので、柔らかい発想で前向きに取り組もう、ということでした。



ファシリテーター：勝身真理子さん

参加者の皆さんからは、「自治会等が男性中心で女性の考え方を取り入れるのは難しい」「ねばならない、だけでは防災への認識や活動が広がらない」など日ごろの活動を通じた声や、「楽しい研修、楽しくなる避難所は女性も参画しやすくなるのでは」「避難所での配布は必ず女性メンバーを入れるなどの工夫を」のほか、IT弱者やプライバシーとの関係、生涯学習など多くの意見や質問が寄せられました。

その中から一つ紹介します。

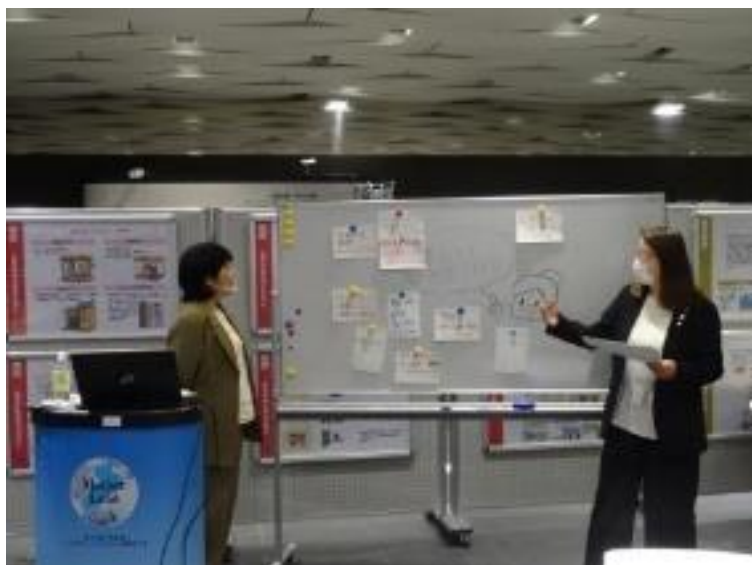
問：ともに守り、守られる避難所の工夫について教えてください。

答：避難所は自宅が危ない人が来るところだと決めつけてしまわないこと。誰も「かわいそうな避難者だ」と思われたくないから行きづらいです。これは、楽しくなる避難所のアイデアの一つですが、避難所に行くとボランティアとしての役割があるようにする。

「危ないからおいで」ではなく、「ちょっと手伝ってほしいから来て！」と言うと、おじいちゃん、おばあちゃんとかも来やすくなります。例えば、仕事として災害対応に当たる方に、小さいお子さんがいたり、親御さんが心配という場合に、臨時の託児所とか託老所のような機能を避難所に持たせると、その方たちは心配なく災害対応の現場に行くことができるし、避難された方も役に立っていると実感できるのではないのでしょうか。

また、次のような「楽しく、長続きするアイデア」も皆さんで出し合い、それぞれの地域でも話題にしてみしてほしいということでした。

- ・大きめのポンチョを準備する。(レインコート、着替えの時にも便利です)
- ・備蓄食料のグルメ大会をする。
- ・週末は家族で携帯コンロで鍋料理を食べる。(非常時の加熱器具の点検など)
- ・本や絵本がたくさんある避難所を作る。(暗い避難所のイメージを変える)
- ・月一回、電気無しでおうちキャンプをする。
- ・学校の体育館でお泊まりキャンプをする。
- ・100均の商品でつくる防災アイデアのコンクールをする。
- ・行事の景品を防災グッズにする。
- ・男性の料理教室で酒の肴にもなる非常食を作る。
- ・おしゃれな携帯用トイレを入れる袋を作る。(トイレに常備しやすくする)



楽しい防災アイデアを考えました

相川さん、勝身さん、参加者の皆さんありがとうございました。